

都市内を移動し「友人と会う」行動の心理的サポートとしての可能性

刀根令子

Psychological Effects of Meeting with Friends for Modern Urban Residents

Ryoko TONE

Abstract: This study discusses the characteristics of urban residents' daily interpersonal exchange. Questionnaire survey on travel behavior to meet with friends was conducted in 2011. Relation among 3 variables "satisfaction with daily interpersonal exchange", "frequency of meetings with their closest friend" and "travel times from respondents' houses to the meeting place with their closest friend" was mainly analyzed. Results have shown generational or gender differences in relation between "satisfaction with their daily interpersonal exchange" and other variables.

Keywords: 都市居住者 (Urban Residents), パーソナルネットワーク (Personal Network), 空間的移動行動 (Travel Behavior), 社会・心理的サポート (Social-Psychological Support)

1. はじめに

様々な情報通信手段が発達し、移動することなしに遠隔地の人とも情報をやり取りできる現代都市において、空間的に移動し物理的に「会う」という行動が、都市居住者の心理的サポートとしていかに機能しうるかを探ること、現代都市のパーソナルネットワークを空間的にマクロなスケールで捉えることが本研究の大きな目的である。

そのためにはまず、現代都市において、人々が日常的にどのような人付き合い行動を行っているか、その実態を把握することが必要である。刀根 (2010) では、2007 年に行った調査データから、東京近郊の都市居住者の日常の人付き合いのための都市内（間）移動について、友人・知人と会う頻度、会う

ための移動時間、友人・知人との関係性の種類、相手との関係性による移動行動の特徴の違いといった基礎的知見を示した。

本稿では、2011 年に新たに実施した調査データを用い、日常の人付き合いが心理的なサポートとしてどのように機能しうるのかという関心に踏み込むため、より心理的な指標「日常の人付き合いに対する満足感」に焦点をあてた分析を行った。

2. 調査内容と本研究で使用する用語の定義

2.1 調査の概要

2011 年に行われた住環境評価に関する実験の参加者 100 名に対して質問紙調査を行った。回答者は、27 歳から 69 歳の東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県 の居住者であり¹⁾、さらに、属性や事前調査での回答内容をもとに、実験のために必要な特定の条件（子育て経験の有無や住環境への関心の程度）を満たす人が選ばれていた²⁾。そのため、本研究では男

刀根令子 〒113-8656 東京都文京区本郷 7-3-1

東京大学 大学院工学系研究科 都市工学専攻

Phone: 03-5841-6227

E-mail: ryo-t@ua.t.u-tokyo.ac.jp

女比、年齢などの分布の偏り（子育て経験があるという条件で選ばれているため）を考慮した分析や、結果の解釈を行うよう努めた。回答者 100 人の内訳は、男性 34 名、女性 66 名、年齢の分布は、20 代が 2 人、30 代が 15 人、40 代が 47 人、50 代が 25 人、60 代が 11 人であった（平均年齢 47.5 歳）。

2.2 会合コミュニケーションと通信コミュニケーション

なお、本研究では、複数の人間が物理的に一つの空間に集って顔を合わせて行うコミュニケーションを「会合コミュニケーション」と呼び、遠隔地にいる複数の人間が何らかの情報通信手段を用いて行うコミュニケーションを「通信コミュニケーション」と呼び以降で区別する。

3. 分析に使用する質問項目

3.1 人付き合い満足度の指標

日常の人付き合いについての満足度を尋ねる質問を設定した。具体的には、生活のいくつかの側面についての満足度を尋ねた質問のうち³⁾、日常の人付き合いに対する回答データを分析に用いた。選択肢は、1. 満足している、2. まあ満足している、3. やや不満だ、4. 不満だ、の 4 つであり、分析の際には得点が高くなるほど満足という関係になるよう得点を反転して用いた。以下、人付き合い満足度と呼ぶ。

3.2 最も親しい友人との会合コミュニケーション
日常の人付き合いの実態を把握するための質問項目として、「最も親しい友人」（1 人）に関して答える質問項目を設定した。具体的にはその友人と会う場所（最寄り駅名で回答）、回答者の自宅からその友人と会う場所（最寄り駅）までの「移動時間」、その友人と「会う頻度」を答える質問を設定した。会う頻度は 4 択、1. 一週間に一度くらい、2. 一か月に一度くらい、3. 半年に一度くらい、4. 一

年に一度くらいであった。分析において、会う頻度は数字が大きくなるほど頻度が高くなるよう得点を反転して用いた。また、移動時間は分数である。

4. 分析

4.1 移動時間、会う頻度、人付き合い満足度の関係

移動時間、会う頻度と人付き合い満足度の 3 項目について相関関係を調べた⁴⁾。まず、年齢や性別で分けず全回答者で分析して傾向を探った。その結果、会う頻度と移動時間には負の有意な相関（Kendall の順位相関係数： $\tau_b = -.225$, $p = .006$, $n = 96$ ）があった。また移動時間と人付き合い満足度にも有意な負の相関が（ $\tau_b = -.172$, $p = .041$, $n = 96$ ）、会う頻度と人付き合い満足度には有意な正の相関（ $\tau_b = .277$, $p = .003$, $n = 96$ ）があることが分かった。

移動時間がかかるほど会う頻度が少なくなり、移動時間がかかるほど人付き合いの満足度が下がり、会う頻度が多いほど人付き合い満足度が上がるという関係である。つまり、親しい友人が地理的に遠いと人付き合いに不満を感じ、会う頻度が多いほど人付き合いに満足感を感じやすいと解釈できる。

したがって、地理的に移動して親しい友人と物理的に「会う」という会合コミュニケーションは、人付き合い満足度に影響を与えるものと考えられる。ただし、人付き合いのスタイルは年齢層や男女による違いもあると考えられるため、以下で年齢層別、男女別に同じ分析を行った。

4.2 年齢層別に見た移動時間、会う頻度、人付き合い満足度の関係

以降、分析に必要なサンプル数を確保するため、[20, 30 代], [40 代], [50, 60 代] の 3 つの年齢層に集約して分析を行った。

まず、友人と会う場所の最寄り駅までの移動時間（分）について、年齢層別の平均値は表 1 のとおり

であるが、各年齢層の平均値に有意な差はなかった（分散分析： $F(2, 93) = .942, p = .394$ ）。

表-1 年齢層別の移動時間平均値（分）

年齢層	平均値 (分)	回答者数 (人)	標準偏差	最小値	最大値
20,30代	29.00	17	22.03	.00	80.00
40代	28.09	46	22.40	2.00	90.00
50,60代	35.09	33	24.37	3.00	90.00
合計	30.66	96	23.02	.00	90.00

次に、移動時間と人付き合い満足度との関係を見ると、20, 30 代の分析 ($\tau_b = -.187, p = .372, n = 17$)、40 代の分析 ($\tau_b = -.075, p = .545, n = 46$) ではともに負の相関ではあるが非有意であった。一方 50, 60 代では移動時間と人付き合い満足度が、有意な負の相関関係にあった ($\tau_b = -.293, p = .045, n = 33$)⁵⁾。

また、40 代の分析においては、会う頻度と移動時間 ($\tau_b = -.292, p = .015, n = 46$) の間に有意な負の相関、会う頻度と人付き合い満足度との間に有意な正の相関 ($\tau_b = .298, p = .026, n = 47$) が見られた（表 2）。つまり、移動時間が長くなるほど会う頻度が減る、会う頻度が多いほど人付き合い満足度も高い、という 2 つの関係が観察された。

これらの年齢層別の分析結果を解釈すると、年齢が上がることで移動時間の長さが友人と会うことの制約としてより強く作用する可能性や、会う頻度が減少することが人付き合い満足感に負の影響を

与える可能性が考えられる。会う頻度あるいは移動時間と、人付き合い満足度との間の相関関係はいずれも 20, 30 代においては有意ではなく、40 代以上の分析で有意な関係として顕在化する。20, 30 代では、友人と会うのに移動時間がかかることや、会う頻度が少ないことの、人付き合い満足度への影響が、40 代以上の世代よりも小さい可能性がある。

4.3 男女による人付き合い満足度についての差異

男女別に分析すると、女性において、会う頻度と人付き合い満足度に関する有意な正の相関がみられた ($\tau_b = .339, p = .002, n = 66$)。会う頻度が多いほど人付き合い満足度が高いという関係である。

しかし、会う頻度そのものに関しては、男女で傾向の違いは見られなかった (χ^2 検定: $\chi^2(2) = 1.395, p = 0.498, n = 100$)⁶⁾。また移動時間においても男女で有意な差は見られなかった (t 検定: $t(94) = 1.906, p = .060$)。この結果から解釈すると、親しい友人と会う頻度や移動時間において男女間に差は見られないが、女性の方が物理的に「会う」という会合コミュニケーションの経験を、日常の人付き合い全体の満足度に反映させやすい可能性がある。

5. まとめ

会合コミュニケーションが人付き合い満足感に与える影響について、基礎的な傾向を探った。本稿ではまだ単純な分析結果であるが、「友人と会う」という経験が心理的なサポートとして機能する程度は、年齢、性別によっていくつかの点で差異があることを示すことができた。

しかし、人付き合いの満足感とは、本稿で扱った指標以外にも、多様な要因の影響を受けるものと考えられる。4-2 で観察された年齢層別の分析結果の差異の背景を考えると、世代による通信コミュニケーション利用の差異⁷⁾、ライフスタイルや友人とのコミュニケーションに対する考え方や価値観の差

表 2. 人付き合い満足度との相関関係（年齢層別）

		会う頻度 (1-4)			移動時間 (分)		
		n	τ_b	p	n	τ_b	p
人付き合い満足度 (1-4)	20,30代	17	.315	.160	17	-.187	.372
	40代	47	.298*	.026	46	-.075	.545
	50,60代	33	.239	.133	33	-.293*	.045
会う頻度 (1-4)	20,30代				17	-.288	.156
	40代		—	—	46	-.292*	.015
	50,60代				33	-.097	.495

* $p < .05$ (両側)

異等が存在する可能性がある。今後の研究において、人付き合いに関わる他の要因との関連や、通信コミュニケーションとの関連など分析を進めたい。

謝辞

調査実施に際し東京大学 明石達生教授，国土技術政策総合研究所 大橋征幹氏，高柳百合子氏，株式会社建設技術研究所 前川裕介氏，村上亮氏に記して謝意を表す。本研究は科研費（22730381）の助成を受けたものである。

補注

1) 実験参加者は，WEB 調査会社の一般モニターの中から一都三県に居住する 25 歳以上 70 歳未満の人から無作為に抽出され，送付された依頼メールに従い設定期間中に WEB 調査(実験のための事前調査)に回答した人たちであった。2011 年 1 月下旬から 3 月上旬の土曜日または日曜日に東京都内の会場(株式会社建設技術研究所)にそれぞれ予約した時間に来場し，1 人ずつ実験と質問紙調査が実施された。全体の所要時間は 1 人 80～105 分として計画されていた。参加者は 7000 円を謝礼として受け取った。

2) 実験の目的のため，本研究で用いる調査データの回答者はいくつかの条件で絞りこまれたサンプルであった。まず，住環境評価に関する実験であったため，住環境にある程度関心のある人を対象とする必要があった。そのため，事前調査の「購入したいと思う住宅」を選ぶ質問において，「家賃は安い，住環境が悪い」条件の住宅を好んだ人を除外した。更に，家賃の安さ，買い物の利便，街並みの美しさの 3 要素のうち，街並みの美しさを第一順位とした人，が実験の参加候補者として選ばれた。また，実験の目的のため，子育て中か子育ての経験があることも条件の一つであった。

したがって，今回の質問紙調査の回答者は，具体

的には，年齢と居住地の条件に加え，子育て中又は子育て経験があり，かつ住環境への関心が低くなく，街並みの美観に関心が高いという特徴を持つ人たちである。さらに，子育て経験に関連し，女性の参加者を多く必要としていたため，男女比は概ね 1:2 に調整されて集められていた。

3) 「あなたの現在の生活について伺います。以下の①から④の点について，どの程度満足していますか。」という質問の下，①現在の住環境について，②家庭生活について，③家庭の経済状況について，④日常の人付き合いについて，という 4 項目にそれぞれ回答するようになっていた(選択肢は本文中に述べた通りである)。

4) 移動時間に関する分析では，移動時間が極端に長い 2 名(180 分，270 分)は外れ値として分析から除外した。

5) 50 代のみで行った分析では非有意 ($t_b = -.244$, $p=.160$, $n=24$) であった。60 代のみで行った分析では有意となった ($t_b = -.786$, $p = .011$, $n = 9$) がサンプル数が少ないため参考に留める。

6) 各セルの度数を確保するため，会う頻度 4 値を 3 値(一週間に一回程度，一か月に一回程度，半年に一回程度以下)にまとめて検定した

7) 総務省(2011)の平成 22 年通信利用動向調査のデータを見ると，世代によるインターネット等の利用状況に年代格差があり，今回の分析結果を解釈する参考となると考えられる。

引用文献

刀根令子(2010)：都市居住者の「人付き合い」のための空間的移動行動，地理情報システム学会講演論文集，講演論文番号 4G-3。

総務省(2011)：平成 22 年通信利用動向調査報告書
http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/statistics/pdf/HR201000_001.pdf (世帯編)